

D.ネル教授の追悼式典と記念シンポジウムの開催について

上村一則

2017年10月3日に逝去されたミュンヘン大学古代法史研究所のディーター・ネル名誉教授（Dieter Nörr, 1931-2017）を偲ぶ追悼式典と記念シンポジウムが、2019年2月19-20日、ドイツ・ミュンヘン大学（LMU）で、生前教授にゆかりがあった世界各国の研究者ら約50名が参加する中で開催された。

19日夕刻、主催者であるヨハネス・プラッチェック教授の挨拶から追悼式典が始まった。日本との良好な関係を培った西村重雄教授からの心温まるメッセージが読み上げられ、アルフォンス・ビュルゲ教授が、ネル教授の業績とお人柄を丹念に紹介し、故人の佇まいが目に浮かぶようであった。その後、市内の古代美術博物館のホールに移動し、古代ギリシアやローマの彫像に囲まれる中、バイオリンの名手でもあったネル教授の音楽仲間によってピアノと弦楽の楽曲が演奏され、追悼の宴が催された。

翌20日には研究シンポジウムが催され、午前中に4回、午後4回の多様な報告と質疑応答が行われた。終始和やかな雰囲気の中で、活発な議論が交わされ、古代法史研究所の伝統である水曜ゼミ（Mittwochseminar）を彷彿とさせた。午後の総司会を務められたミヒャエル・ライナー教授が、最後に「ネル教授は多様な方面に才能を発揮され、古代法史研究に大きな痕跡を残したが、常に一貫して忘れなかったのは、史料に基づいた実証的な研究であった。私たちはこれを受け継がなければならない。」と強調され、深く印象に残った。ネル教授の所蔵図書は、スイス・チューリヒ大学に収蔵さ

れた。

なお、ネル教授に関する追悼文のうち、サヴィニー雑誌(ZRG RA) 136号(2019年)に経歴などが特に詳細に紹介されており、4人の愛弟子の個人的な思い出の文章が胸を打つ。